

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009 年度

課題番号：19520300

研究課題名(和文) インド中世初期における女神の最高神化の機制

研究課題名(英文) The mechanism of the rise of the Supreme Goddess
in the early mediaeval India

研究代表者

横地 優子 (YOKOCHI YUKO)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：30230650

研究成果の概要(和文)：インドでは3世紀以降の女神信仰をヒンドゥー教大伝統に融合する流れのなかで、雑多な個別の女神たちを統合する<女神>概念が生み出された。8～9世紀にはその極点として、宇宙の最高原理としての<至高女神>が成立したが、この<女神>は王権を支持基盤とする<戦闘女神>を核として、シヴァ教神話における<配偶女神>を統合し、宇宙に遍満するシヴァの力(シャクティ)という概念を教理的基盤とすることで成立しえたことを解明した。

研究成果の概要(英文)：In India, since the third century AD, the idea of <the Goddess> had taken shape from various goddesses during the process of integration of the goddess worship into the orthodox Hindu tradition. As a culminating point, in the eight to the ninth century, the Supreme Goddess, the highest deity and principle of the universe, rose. This was resulted from the evolution of the virgin Warrior Goddess under royal patronage, who integrated the Consort Goddess of the Shaiva mythology into her as a secondary manifestation. It is also significant that the concept of shakti, Shiva's power pervading the universe, provided the Supreme Goddess with a theological support.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	431,750	240,000	671,750
年度			
年度			
総計	2,931,750	990,000	3,921,750

研究分野：サンスクリット文献学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：スカンダプラーナ、女神神話、女神信仰、中世ヒンドゥー教史、プラーナ文献校訂、デーヴィーマーハートミヤ

1. 研究開始当初の背景

(1) インドにおける女神神話・女神信仰の研究は枚挙にいとまがないが、その歴史的な発展過程に関しては、これまでに十分な研究がなされているとはいえない。なかでも、『デーヴィーマーハートミヤ』(以下 DM と略) は、現在に至るまで女神信仰のもっとも重要な聖典とみなされており、その内容に関する思想的・宗教的側面からの研究は多いが、一方女神信仰の発展過程のなかでのこの文献の歴史的な位置づけについては、以下にふれる本研究者の論文を除いてはほとんど信頼するに足る研究がなされておらず、また成立年代に関しても、十分な検討がなされないままに、6または7世紀が定説として流布している。このような欠陥は、なによりもこの文献に差先立つ女神神話を扱う資料が断片的であったためである。

(2) この状況は女神神話を含み6～7世紀に成立したことが確実である原『スカンダプラーナ』(以下 SP と略) により一変した。この文献は1988年に初めてカトマンドゥで出版された。同時期にオランダの Groningen 大学の研究者グループがこの文献に注目し、初版の校訂本が校訂方針やこの文献の歴史的な位置づけの認識において不十分であったことから、より多くの写本を収集し、より厳密な文献学的手法に基づく新しい校訂本の出版と、それに基づく研究を行うプロジェクトを開始した。本研究者は1995年8月からこのプロジェクトに参画し、主にヴィンディヤ山女神神話サイクルの校訂と、それを主資料として、3～9世紀にかけての女神神話・信仰の発展過程の研究を行ってきた。

(3) 上記の DM の研究は、本研究者の女神研究の出発点であるが、1999年にこの文献の歴史的な位置づけ、それに伴う新たな年代設定(8世紀後半頃)と内容分析を行う論文を発

表し、2000年に邦訳(平凡社東洋文庫)を出版している。が、この時点では SP の女神神話の校訂・研究はまだあまり進んでおらず、SP の女神神話にはその内容に簡単にふれるにとどまっている。その後の研究の結果、SP と DM が予想以上に密接に関わっていることが判明し、その点に関して2006年7月に第13回国際サンスクリット学会(エディンバラ)で予備的な報告を行った。

2. 研究の目的

(1) 3～9世紀にかけてのインドにおける女神神話・信仰の発展について、本研究者による過去の研究成果をもとに、研究開始時までに、その発展過程を ABC の3つの潮流に区分し、以下の仮説をたてた。A: 水牛の魔神を殺す女神とヴィンディヤ山の女神を中核として<戦闘女神>が成立・発展する潮流、B: シヴァ信仰において、シヴァ妃パールヴァティーが<戦闘女神>と社会的によりレベルの低い信仰対象であった女神たちを吸収し、最高神シヴァと対をなす<配偶女神>として成立・発展する潮流、C: より専門的・秘儀的なシヴァ教の諸集団のなかでシヴァのシャクティ(「力」)が重要な原理とみなされるシャクティズムが成立・発展する潮流、である。中世初期にこの3つの潮流がさまざまな形で融合した結果、あらゆる女神、ひいては宇宙がその顕現とみなされる<至高女神>という概念、その女神への信仰が成立した。この概念、信仰の成立を端的に示すのが、前述の DM である。この仮説の中の3つの潮流のうち、本研究開始時までに A と B については詳細な研究を行ったので、本研究では C の調査を行い、さらに DM とそれ以前の文献の比較をもとに、3つの潮流が融合して<至高女神>が成立するメカニズムを解明することを目的とする。

(2) SP の写本は大きく3系統(S, R, A)に

分類され、そのうちネパールに伝わる9、10世紀の写本3本で構成されるSは、SPの当初の形をもっともよく保存しており、共同プロジェクトの校訂作業はこのSを基本としている。RとAは東インドに伝わる17世紀以降の写本8本(R1本、A7本)より成り、8～11世紀の間に成立したSPの改訂版を共通の祖先とする。以上は共同プロジェクトの成果として、本研究開始時までにすでに解明されていたことであるが、もっとも重要なSの3写本の相互関係とネパールへの伝承過程、およびAの7本の写本の相互関係(そのうち3本は近年新たに獲得されたもの)は確定されておらず、その解明が本研究の第2の目的である。さらにSPのヴィンディヤ山女神神話サイクルについては、本研究開始時に暫定的な校訂と英語のシノプシスを完成していたが、写本間の相互関係を確立した後、特にAについては新たに校訂に用いる写本を選びなおした上で、校訂テキストとシノプシスを全面的に改訂し、神話サイクルの分析および写本の相互関係を考察するイントロダクションとともに出版する。

3. 研究の方法

(1) Cの潮流については、まずシヴァ教パーシュパタ派の文献についてはパーシュパタ経典とそれに対するカウディニヤの注釈、およびSP中のパーシュパタ関連の記述を精査する。つづいて、近年研究の発達が著しい初期シヴァ教タントラ文献中の記述を精査する。

(2) <至高女神>の成立の機制については、DMの成立年代、SPに含まれる複数の女神神話との関係、シャクティという概念の用法などを検討し、それ以前に成立したヴィシュヌ系、シヴァ系などのさまざまな女神神話の総合という観点から考察する。また、<戦闘女神>信仰の地理的広がり、王権との関係を

考察するため、本研究開始時以前に本研究者がインドでのフィールドワークを通して収集した、寺院遺跡・図像などの考古学・美術史資料を活用する。

(3) 「研究開始当初の背景」で述べたように、SPの校訂はオランダの Groningen 大学を拠点として国際的な共同プロジェクトとして行われており、現時点では本研究の海外研究協力者バッカー氏(Groningen大学教授)・ビショップ氏(現ライデン大学教授、当時はエディンバラ大学講師)兩名と本研究者が中核メンバーである。そのため、SPの写本間の関係の再評価と系統図の確立、ヴィンディヤ山女神神話サイクルの最終稿の作成は、年に1、2回行われるSPプロジェクトのセッションでの上記海外研究者との討議と電子メール等を通しての頻繁な意見交換を経て行われる。最終的には *Skandapurana Volume III* として、スカンダプラーナの新校訂版シリーズの一冊として Groningen から出版される予定である。

4. 研究成果

(1) Cの潮流：まずカウディニヤ注では、すでにシヴァ教タントラ文献に類似するシヴァのシャクティの概念とその分類がみられるが、教義内でこの概念が果たす役割は大きくなく、また女神信仰の痕跡はみられない。SPでは一例のみではあるが、シヴァ妃パールヴァティーをシヴァのシャクティと呼ぶ例があり、シヴァ神話の領域では女神をシャクティの具現とみなす考え方はすでに始まっている。一方、シヴァ教タントラ文献のうち、正統的なシッダーンタ派では、シヴァのシャクティという概念は非常に重要であるが、あくまでも「力」であり、女神として具現されることはない(論文③はこの研究の副産物)。女神信仰との融合は非シッダーンタ・グループの文献に顕著であるが、このグ

ループの女神たちは本研究の中心となる〈戦闘女神〉とは異なっており、融合の背景は区別して考える必要がある。女神信仰はしばしばシャクティズムと呼ばれるが、シャクティズムと女神信仰は本来別個に発展したものであり、その両者を完全に融合させた最初の文献がDMであるといえる。

(2) SPの写本間の相互関係：まずA系統の7本の写本は3群に分類される。第1群：A7、第2群：A4・A5（A5はA4のアポグラフ）、第3群：A1・A2・A3・A6（A1はA2のアポグラフ）。3群の関係は、A7がもっとも古くAの祖形に近いと考えられ、第2群と第3群の共通の祖形はとA7とAの祖形を共有する。しかしこの系統図はあくまでも全体の見取り図であり、個々の写本に関しては異なる群の写本間の合成が著しい。校訂に際しては各群を代表する写本としてA7・A4（A4が欠けている場合にはA5）・A3（A3が欠けている場合にはA2）の3本を使用することを決定した。次にSに関しては、S2とS3/S4（S3とS4は同写本の別の部分）が祖形を共有することはすでに判明していた。S1とS2群のSの祖形からの分岐はこれまでネパールで生じたと考えられていたが、3系統の写本間の異同の詳細な検討により、この分岐は北インドで生じたと仮定するのが妥当であることがわかった。S1は多くの点でユニークな異読を示していること、RとAの読みはS2の群により近いことから、S1の祖形写本は早い時点でS系統から分岐してネパールに持ち込まれ、独自性を強めたと思われる。以上のように写本間の相互関係を解明した後、ヴィンディヤ山の女神サイクルの全面的な改訂を完了したが、出版のための作業は予定よりも遅れており、現在2011年秋の出版をめざして最終段階の作業を行っている。

(3) 〈至高女神〉成立の機制（論文①）：①

DMは、〈戦闘女神〉の魔神討伐に関与する3つの物語とその前後に置かれた枠物語で構成されている。最初の物語は、ヴィシュヌが魔神マドゥとカイタバを殺すというよく知られた神話の一変形であり、この変形ではヴィシュヌのヨーガによる宇宙的な眠りを擬人化した女神ヨーガニドラー『ハリヴァンシャ』において「ヴィンディヤ山の女神」と同一視された、ヴィシュヌの眠りの女神ニドラーと同じ女神—と、ヴィシュヌの幻術をふるう能力を擬人化した女神マハーマーヤーが同一の女神とみなされ、この女神がヴィシュヌの魔神討伐を援助する。第2の物語では、〈戦闘女神〉がすべての神々のテージャス—熱や光として表象される、生物の内的な力であり、他者を圧倒する威力—の集合体から生まれ、ライオンにまたがり、水牛の姿をもつ魔神マヒシャと彼の軍を滅ぼす。最後の物語の始まりで、魔神兄弟スンバとニスンバが率いる軍勢に敗北した神々は、この〈女神〉に再び助けを求めるが、その際この〈女神〉はヴィシュヌのマーヤーとも呼ばれ、最初の物語に登場したヴィシュヌのヨーガニドラー/マハーマーヤーとも同定される。神々の求めに応じて、〈女神〉はパールヴァティーの身体から出現し、カウシキー（SPにおけるヴィンディヤ山の女神の別称）と名づけられ、さらに〈女神〉の低位の顕現態である恐ろしい女神たちとともに、魔神軍と將軍たち、最後にかれらの王であるスンバとニスンバを滅ぼす。この最後の物語の中で、〈女神〉は「ヴィンディヤ山の女神」とは呼ばれていないが、この物語がSPに語られたようなヴィンディヤ山女神神話に基づいていることは明らかである。このように、この3つの物語を通して、ヴィシュヌ教神話に包摂されたヴィンディヤ山女神神話とシヴァ教神話に包摂されたそれ、および水牛の魔神を殺す女

神の神話とが、一柱の〈戦闘女神〉の神話として統合されている。一方、戦いの場所は特に言及されず、普遍的な〈戦闘女神〉を成立させるために、前段階の「ヴィンディヤ山の女神」と「水牛の魔神を殺す女神」を合体させた女神に備わっていたヴィンディヤ山地という地域性は、意図的に捨てられたと思われる。

②この普遍的な〈戦闘女神〉は、さらにこの文献では、すべての神々を超える最高神として〈至高女神〉の地位に到達している。この点は〈戦闘女神〉がすべての神々のテージャスの集合体から生まれるという記述からもうかがえるが、それをより明確に示すのは、第3の物語の始め、パールヴァティーからこの〈女神〉が出現する場面である。SPのヴィンディヤ山女神神話サイクルでは、パールヴァティーが苦行の結果黒い肌を脱ぎ捨て明るい肌色を獲得し、その脱ぎ捨てられた黒い肌から、暗色の肌色をもつ「ヴィンディヤ山の女神」が生まれる。一方DMでは、第2の物語で太陽の輝きを与えられ、その光輝で全世界を照らし出すと述べられた〈戦闘女神〉が、ガウリー「明色の女」と呼ばれるパールヴァティーから出現し、その結果パールヴァティーはカーリカー「黒い女」になる。これはあたかもパールヴァティーの生命力が〈戦闘女神〉として放出されて、彼女は黒い残り滓となったかのような印象を与える。この記述の変化、すなわち両女神の間の色の交換の結果、SPにおける〈配偶女神〉パールヴァティーとその下位の顕現態「ヴィンディヤ山の女神」の階層関係は、DMにおいて逆転され、〈戦闘女神〉は潜在的な〈配偶女神〉パールヴァティーの上位に位置づけられることになる。さらに、この〈戦闘女神〉には「ヴィンディヤ山の女神」の特徴の一つであった処女性が賦与されていることも重要である。

永遠なる処女として、この〈女神〉は男性配偶神をもつことなく、したがって男性最高神に従属するか、対となる〈配偶女神〉になりえないため、あらゆる神格を超える絶対的な最高神格となる。このようなDMの〈至高女神〉は、思想的には、最高の原理として宇宙に遍満するシャクティ「力」という概念に支えられており、すべての女神たちはこのシャクティの顕現態であり、〈至高女神〉はその最高の顕現態であるとみなされる。既に述べたように、この概念は〈女神〉の形成期のCの潮流において発達し、そこから借用されたものである。

③このようにDMでは〈戦闘女神〉は〈至高女神〉となったが、同時にこの〈至高女神〉はその性格と王権との関係において〈戦闘女神〉であり続けている。まず上述の三つの物語について、そのすべてにおいて〈女神〉が魔神たちを討伐し、神々と世界を守ることが強調されている。また、神々のテージャスの集合体から〈女神〉が生まれる場面は、王の後継者がさまざまな神々からその力の一部を受け取って王となるという、即位儀礼の考え方を想起させる。さらにこの文献が作られた目的を考えるには、杵物語が鍵となる。杵物語の中心人物はスラタと呼ばれる王であり、王国を失ったこの王がメーダスというバラモンから3つの〈女神〉の物語を聞き、彼の教えに従って〈女神〉の信徒となり、最終的に〈女神〉の恩寵で王国を回復し、次生では次の時代を主宰する人祖になると言われる。スラタ王はこの文献の享受者の模範として設定されており、この杵物語はこの王にならって〈女神〉を崇拜すればその恩寵により王国を維持、または新たに獲得できるという考え方を鼓吹する。さらにこの杵物語の中で、この文献を〈女神〉を祀る儀礼、特に秋の大祭において朗誦することが薦めら

れ、この祭での朗誦がこの文献が〈女神〉信仰の聖典として作られた直接的な目的であったことを示唆する。この秋の大祭は、現在ドゥルガープージャーの名でよく知られているナヴァラートリ「9夜祭」に相当するものであるが、この「9夜祭」の儀規を記述する最古の文献『ヴィシュヌダルモッタラ・プラーナ』(7~8世紀頃)では、〈女神〉の礼拝は武器を清め、礼拝する儀礼と合体しており、王権儀礼の一環となっていたと推測される。したがって、DMの作者が想定する〈女神〉の大祭も王権儀礼であった可能性が高い。以上の点はすべて、この文献が王権に關与する環境で作成されたことを示しており、DMは〈女神〉形成史の中で、基本的にはAの潮流に属し、そこにBとCの潮流が流れ込んだ合流点と位置づけることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①横地優子「処女戦士が最高神となるとき」『アジア女神大全』青土社、2011年、345--363頁 (査読無)
- ②横地優子「グプタ期におけるヒンドゥー教大伝統の形成—神話と図像から—」『インド世界への憧れ—仏教文化の源郷を求めて—』シルクロード学研究センター、2008年、24--38頁 (査読無)
- ③ Domic Goodall, Kei Kataoka, Diwakar Acharya and Yuko Yokochi. "A First Edition and Translation of Bhatta Ramakantha's Tattvatrayanirnayvivrti," South Asian Classical Studies, No. 3, 2008, pp. 311-384. (査読有)

[学会発表] (計2件)

- ①横地優子, 'How to Incorporate Vaisnava Myths into the Shaiva Mythology.' 14th World Sanskrit Conference, 2009年9月4日、京都大学百周年記念館
- ②横地優子「叙事詩・プラーナ文献における聖地ゴーカルナの伝承」インド思想史学会、2008年12月20日、京大会館

[図書] (計1件)

- ① (共著) 山崎元一・小西正捷編『世界歴史

大系・南アジア史1：先史・古代』, 山川出版社, 2007年, 294-317頁 (第9章)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横地優子 (YOKOCHI YUKO) 京都大学文学研究科・准教授
研究者番号：30230650

(2) 研究分担者 なし

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 なし

()

研究者番号：